

H26. 2. 15

先天性風疹症候群



「ウイルス」シリーズ終わり



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。55歳。

インフルエンザが依然猛威をふるっています。流行はA型からB型に移ってきました。今回はこの時期にあえて風疹について書きます。

昨年は風疹が大流行しました。風疹自体は麻疹や水ぼうそうに比べて軽く、「3日はしか」とも呼ばれています。しかし、妊娠初期の母親が感染するとウイルスが胎盤から胎児に移行して先天性風疹症候群(CRS)を起こしま

「空白世代」はワクチン接種で予防を

0人が風疹に感染しました。患者の7割以上は男性で、20〜40代が8割を占めました。31件ものCRSが報告されました。1人のCRSの背景に

は約60倍の自然流産があるといわれています。風疹に感染した妊婦さんは人工妊娠中絶が多いともいわれています。つまり、風疹は多くの命を奪っているのです。

20〜40代の男性と20〜30代の女性には免疫がない人が多く、ワクチン未接種の年代層である「空白世代」が昨年の風疹の流行を生みました。従って、CRSを減らすためには、妊娠前の女性のみならず、社会生活を営むすべての人の間で流行を抑えることが大切です。

ではなく、抗体価にかかわらず一斉にワクチン接種したほうがトータル費用が安く済むということが分かっていました。

ワクチンの副作用が心配な人も多いでしょう。すべてのワクチンに副作用はつきものですが、風疹ワクチンの安全性は高いことが分かっています。

先天性風疹症候群(CRS) 妊娠4カ月以前の妊婦が風疹にかかると、胎児に先天性心疾患、白内障、難聴、発達障害などが起こる。症状には個人差があるが、妊娠初期の感染であるほど胎児に影響が出る確率が高くなる。

CRSを予防するには、家族ができるだけワクチン接種を受けることが大切です。予防接種には谷間の世代があります。現在、26歳以上の男性と26〜34歳の女性です。平成23年に国が行った調査によると、20〜40代の男性の15%、女性の4%は風疹への抗体を持っておらず、さらに11%は低い抗体価だそうです。

しかし、血液検査でこうした風疹抗体価を測定してから

接種するのは、女性は妊娠していない時期の生理中、その直後が一番よいです。ワクチン接種後2カ月は避妊する必要があります。

ワクチンの接種費用は、単独ワクチンでは4千〜8千円、混合ワクチンで8千〜1万2千円と、平均約1万円もかかります。もし20〜40歳の全員が接種すると4800億円の費用がかかるそうです。一部の企業や自治体では妊娠

ワクチン接種しておくことが大切なのです。ウイルス対策は流行の2年前が重要。そろそろインフルがピークを迎えようとしているこの寒い季節ですが、風疹ワクチンの接種もぜひ忘れずにいただきたいと思えます。

この時期なら、風疹ワクチンにも余裕があります。「風疹ワクチン接種、いつやるの？ 今でしょう！」。なんて感じでしょうか。

ひようつい